
ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

【Nコード】

N9388Y

【作者名】

ジンダイ

【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しずつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

プロローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。

そこにいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもついでんしポケモンのミュウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまおうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら言う。

ミュウツー「戦いは、復讐は何もつみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやってくればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這ってきた。

????「帰ったぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんどくポケモンのダークライ。

ミュウツー「…どうだったか」

ダークライ「シェイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言っていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ」
ギラティナ「すまん…皆の説得を任せて…」
ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行ってくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミュウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会うことすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミュウツー「…そうだな」

ミュウツーはそう言うと、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミュウツー「私は前回の戦いには参加していなかった…もう戦いはうんざりだったからな」

ミュウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には無人島が写っていた。今だにかたづけられていないガレキがちらばっている。

ミュウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴拳を止める」

ミュウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」

ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれば…皆もやめてくれるかもしれないから…」

そして同じ頃、ある村で運命がうつごきだした…

ブログ（後書き）

ふーやっと終わった〜途中で意味分かんなくなって3回ほどきえちやったよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。感想を書いてもらえれば嬉しいです。どうかよろしくお願いします。

6月3日 ポケモンが貰える日(前書き)

第1話 よう～～～～～～～～～～やく始動!!!な……長かった……
軽く3、4回ほどきえたよ……本文……

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤ「準主人公と言っしてほしいね」

一緒じゃん。

ナオヤ「ハア、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

(カチン) それ、本気なのかな？ナオヤ君？

ナオヤ「本気に決まってるじゃないか」

フーン (ニヤリ) じゃ、本編スタート!!!!

ナオヤ「何言ってたんだ？作者は？」

6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。朝、この島のひとつの民家で少年が眠っていた。

少年「ZZZZ…」

お母さん「コウタ〜朝よ〜起きなさい〜」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

コウタ「ん〜ん〜もう朝か…眠む」

少年…コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ〜いいの〜」

コウタ「なぬ!! そうだったのか!!? 僕としたことが…今いくぞ…!!!」

コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人は今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

コウタ「リビングに到着!!!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね〜いつもとは大ちが…」

コウタ「いただきますごちそうさまできますダツガチャドガ

ツバタツ」

コウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のコウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「コウタく気をつけて行ってらっしゃい」

お母さんは玄関であった事に気づいてないようだ。

コウタ「痛って…おい！ナオヤ！！危ねえだろが！！気づけるよ！！」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが！！！！」

この少年はナオヤ。コウタの幼馴染みであり、親友だ。

???「全く…二人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくnゲボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまった。

メイ「だくれが乱暴凶悪女って？」

この少女の名前はメイ。二人の唯一の女友達だ。というより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど二人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきゃ」

そう言って、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言った？（怒）」

ナオヤ「いえ何も（汗）」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になったので、コウタとナオヤの方が年上なのだ。

コウタ（メイって将来、ずっと黙ってたら絶対モテるよな…）

メイの事を密かに可愛いと思っているコウタは、ナオヤがボロボロにされているのを見ながらそうおもった。

メイ「じゃっ、あそこのぼろ雑巾はほっというて祠に急ぎまじょうか」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「……………グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになっているナオヤだが、どうせいつもの事なのでコウタはほうっておいた。

メイ「ねえ、コウタ？最初のポケモン誰にするの？私はリリーラとホエルコがいいな」

ナオヤ「俺はアノプスとジーランスがいいZ E」

コウタ（いつもながら復活早）

メイ「黙れ、社会のテスト*点が。（点数はある人物の要請により削除）」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…そのテ

ストは頑張つて追試でとりかえしたし……」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に二人は先に行つてしまった。

ナオヤ「おい！まってく「グボハツ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかった。

6月3日 ポケモンが貰える日(後書き)

ナオヤ「オイ！作者！！」

んゝ、何ゝ

ナオヤ「何だよ！あの俺のあつk……」

ネタキヤラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！？」

じゃあ、また今度。 ダツ！！

ナオヤ「あつ、逃げられた……」

さあ、いざ祠へ！！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロソースデイが、ぼやきながらGENT
Sの続きを書いております。

コウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょ、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

コウタ「え！？そうなの！！？」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7
1点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすごいんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だった
ということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロソースデイ「うるせえ！！！」

！！！
ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！

さあ、いざ祠へ！！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタったら…」

一応、この村にもトレナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

コウタ「あつ、見えてきた」

コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「コウヤさん！？」

コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行ってくれるんですか？」

この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けっこうチャラくて軽い性格だ

コウヤ「おうよ！いけ！！ジーランス！！！」

コウヤのモンスターボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じら〜」

ユウヤ「さ、みんなこれに掴まってくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掴まった。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！！」

ジーランス「じらっ！！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシヤン

4人はジーランスと共に、海底へとむかった。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボボボボボボ！！……！！」

コウヤ（あれ？そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ……）

祠の入り口

ナオヤ「げほっ、げほっ、げほげほげほっ」

ユウヤ「悪いい、ジールランスは3人乗りだったわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない様子で謝る。

メイ「さっ、行くわよ」

コウタ「うん」

ナオヤ「俺についてはノーコメントですか…」

そして4人は祠の奥に向かってあるきだした。

さあ、いざ祠へ！！（後書き）

短くてすみません。時間ないんで。

伝統の儀式

祠、最深部

そこにある巨大な石板の前に、40代ほどのチヨビ髭をはやしている男性…村長がいた。

村長「よく来たな、コウタ、ナオヤ、メイ。案内ご苦労だった、コウヤ。」

コウヤ「いってことよ、村長」

メイ「こんにちは！叔父さん、今日はよろしくお願いします！！」

ナオヤ（メイは村長の姪だもんな、めいだけに）

メイ「叔父さん、ちょっと待っていてくださいね」

村長「嗚呼、いいが」

メイ「ナオヤ〜ちょっとこっち来てくれる？」（怒）

どうやら、ナオヤの心の眩きはメイにお見通しだったようだ。

ナオヤ「ちょっとメイさん、髪の毛引っ張らなくていいよね？痛いんだけど」

メイ「じゃあ、その痛み消してあげるよ」（黒笑い）

.....

ナオヤ「くぼはあああああああ！〜ぎいやあああああああ
ああああ！〜！.....」

メイ「終わりました」

そして、皆ナオヤの事はスルーして話を初めた。

村長「では、儀式の内容はわかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「……………ハ……………イ……………」

まだナオヤは大丈夫なようだ。

村長「まず、儀式の内容を確認する。最初にホエルコ又はジークラスを選び、受けとる。そのあと、儀式を行ってもう1匹のパートナーは、アノプスカリリーラかを決める。わかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！」

ナオヤ「OK！！！」

コウタ（復活早……）

この村では、最初のポケモンがキモリ、アチャモ、ミスゴロウのホウエン初心者用ポケモンではなく、世界の中で野性がここにしか生息していないアノプス又はリリーラ、この島から旅立つために必要な技、なみのりを覚えているホエルコ又はジークラスなのだ。

この島の周りは激しい海流が流れているので、船がとおれず、ポケモンでいくしかないため、ポケモンリーグはこの辺りの島から旅立つトレーナーのみ、ジムバッチ0個でもなみのりを使うのを認めている。

村長「やり方は、まず自分の旅の目標を書いた紙を祭壇の火に投げ入れる。そしてその紙が燃え尽きるまでの時間でパートナーを決める。これもいいな？ では、今から儀式を初める。まず誰から？」

ナオヤ「ハイハイハイ！！！！俺から行きます！！！」

コウタ「あつ、抜け駆け……」

メイ「まったく……」

ナオヤは早速、紙に旅の目標を書き炎の中に投げ入れる。

ナオヤ「行けえい!!」

それと同時に村長はストップウォッチで、炎の中の紙がどれくらいで燃え尽きるのかを測る。

そして、1分位した後、紙は完全に燃え尽きた。

村長「え〜と……今のタイムから……ナオヤ、君は、……」

村長は何やら名簿の様なものをみていたが、口を開いた。

村長「アノプスだな」

ナオヤ「イヨツシャアアアアアアアアアアアアア!!」(ドヤ顔)

ナオヤは自分の欲しかったアノプスが選ばれ、思わずドヤ顔をしたが、

メイ「キモイ」

コウタ「それは……ちよつと……」

ユウヤ(プププ、バツカじゃねえのか、こいつ)

村長「……」(失笑)

うけなかった様だ。

ナオヤ「……」(泣)

メイ「さ、しょげてるやつはほつといて私の番」

メイが張り切って儀式をしている間、コウタは壁の凹凸を触っていたコウヤに、気になっていたことを聞いた。

コウタ「あの…コウヤさん…」

コウヤ「ん、何だ？」

コウヤは壁から手と目を離さずに答える。

コウタ「どうしてこの村には、こんな儀式があるんですか？」

コウヤ「この儀式が発祥した訳か？」

コウタ「はい。何か知っていますか？調べたけど何処にも書いてなくて」

コウヤはやっと壁から目を離して言った。

コウヤ「悪い、俺も知らん」

コウタ「そうですか…」

コウタは少し、がっかりした様子だ。

コウヤ「そもそもこの儀式自体、あまり意味ないしな」

ナオヤ「どうゆうことだ？」

いつの間にか復活していたナオヤが聞く。

コウヤ「実は最初のポケモンは、みんなもう決まってるんだ、スクールのアンケートで。この儀式は形だけだよ」

コウタ、ナオヤ「……………」

二人は絶句する。

コウヤ「この事は、なるべく秘密にな」

ナオヤ「……………なんで、こんなまわりくどいことするんだ？」

コウタ「伝統だからだろうね……………」

その時、メイが儀式を終わらせて戻ってきた。

メイ「お〜い、コウタ〜ナオヤ〜 私はリリーラとホエルコになったよ」

コウタ「う、うん。」

ナオヤ「よ、よかったな」

もうポケモンは決まっていたということを知ってしまった二人は、複雑な気持ちでメイにこたえる。

メイ「？二人共どうかした？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ、何でもありません！！！」（汗）

メイ「そう？」

慌てていた二人をメイは疑わしそうに見ていたが、ポケモンをもらったことで機嫌が良いらしくそれ以上何も聞かなかった。

コウタ「次は僕の番か……………行ってくる！」

ナオヤ「お、おう。」

メイ「行ってらっしゃい。自分の好きなポケモンが貰えるといね」

その言葉を聞いた二人は、また複雑な表情になる。

コウタ「う、うん…そ、そうだね」(汗)

ナオヤ「アハハハハハ…」(汗)

メイ「本当にどうしたの？二人共？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ！！本当に何でもありません！！！」

(汗)

メイ「？」

キョトンとしているメイの横を走って通り過ぎ、コウタは村長の元へ向かった。

村長「では、今からコウタの儀式を初める」

コウタ「ハイ！！！」

コウタは紙を受けとると、早速かきはじめた。

コウタ(あれ？僕みたいに欲しいポケモンの名前をはっきり書いてない時はどうなるんだろう……)

コウタは書きながらそういうことを考えていた。

ユウヤ(はっきり書いてない奴は、村長がどっちをやるのか決めるんだっただな…コウタはどっちになるんだか)

そして準備が完全に済んだコウタは、紙を炎に投げ入れ、その紙は燃え出す……

はずだった。

紙は炎の中にはいるも、すぐにそこから真上に飛び出し、しばらく空中をまっただあと、村長の後ろにある石板の上に乗ってしまった。

村長「ま、まさか……こんな事が本当に!?!?………」

村長はかなり動揺している。

コウタ（あちゃ〜しくったかな…）「すみません、もう一度やり直します」

コウタが石板に手を伸ばし、紙を取ろうとしたのだが……

村長「やめるコウタ!!!お前のパートナーはもう決まった!?!?!」

半分取り乱している村長の声により、中断させられた。

コウタ「どうゆう事ですか?」（アノプスカリリーラどっちだろ…）

村長「……お前のパートナーとなるポケモン達は……この中にいる」

なんとか落ち着きを取り戻した村長は石板を指差す。

コウヤ「一体その石板の上に紙がのったらどうなるんですか?村長」

ナオヤ「この石板がポケモンなのか？」

兄弟で村長に問う。

村長「いや、正確にはこの祠の奥に封印されているポケモンだ…儀式の紙が石板の上のつたということとは…まさか代々伝わる、儀式の元になっている話が現実になるなんてな…夢にも思わなかったことだ」

コウタ「一体なんの話を……」

村長「コウタよ、こちらにこい…今から石板の封印を解き、お前のポケモンと会わせる…お前は守護神に選ばれしものだ…」

運命の齒車は加速を始める…この少年達と守護神と呼ばれるポケモン達との出会い…そしてまた、別の出会いにより…
運命はもう、止まらない。

伝統の儀式（後書き）

コウタ「で、結局僕のポケモンは？」

それは秘密。

コウタ「まあ、いいか。どうせ次わかるし……」

分かんないよ。

コウタ「分かんないの!!!??」

だって次回とその次の話では、君達の出番はないし。

コウタ「じゃあ誰がでるんだよ!?!」

今回は新キャラが出る、とでもいっておくよ。

コウタ「次の次は？」

いや、流石にそれは言えないね。

コウタ「……………どうしてもダメですか？」

うん、ダメ。

コウタ「じゃあ僕にだけ」

しょうがないな〜 ゴニョゴニョ

コウタ「えっ！？あいつが!!」

そだよ。じゃあ今日はこの辺でさよなら

コウタ「唐突におわったな……」

7人のトレーナー (前書き)

よし、第5話完成つと。2日かけて5、6時間ほどかかったよ。

ナオヤ「短い割には時間かかり過ぎじゃね？」

DSのタッチパネルで書いてたらそりゃ遅いわ。

ナオヤ「はあ、DS!!?どういつこつた!？」

今までの小説は全て3DSやDSIのインターネットブラウザで書いてました。画面閉じたら文章消えるわ、考えてたら急に接続切れるわでもう大変だよ…………

ナオヤ「PC持ってないのか？」

持つてるのは持つてるけど親がインターネットに接続することを許してくれない!!!

ナオヤ「悲しいな、だからいつもあんなに短かったのか」

そうだよ、でも君のモデルである伝書鳩リネロサーステイからは本名と住所さえばらさなければナオヤに何をしても、何を言ってもいいっていう許可なら出たよ。

ナオヤ「その許可はいらあああああああああん!!!」

さて、僕が一生懸命書いた第5話、スタート!!!!

7人のトレーナー

AM6:00

ここは119番道路、野生のヒンバスが生息している場所だ。
この道路の隅に立ててあるテントから、一人の男が出てきた。

???A「ふあゝ、よく寝たゝ」

???B「おはようございます、ブイマル先輩」

すでに外にいた青年が挨拶をする。

ブイマル「おはよ、ヒカル」

この二人は、ブイマルとヒカルというようだ。

???C「……………いい…朝だな……………」

テントの裏に座っていた男が言う。

ブイマル「おう、ミスト。おはよ」

ミスト「……………おはよう……………」

この男は、ミストというらしい。結構無口な様だ。その時、

???D「おっはようございませす!?!?!」

???F「今日も!元気に!?!?!いつこつZEEEEEEI!?!?!」

テントから、異様にテンションが高い二人が出てくる。

ヒカル「マサヤ…シユウ先輩…いつもながら、朝から元氣よすぎですね…」

ヒカルが呟く。この二人の名はマサヤとシユウ。

マサヤ「シユウさん 朝バトル行きましょう ……！」

シユウ「OK!! いくZO!! メタグロス!!…！」

マサヤ「ドリュウズ!!! GO ……！」

早速、朝一番にバトルをするマサヤとシユウ。

????F「なんだなんだ? また、マサヤとシユウか!？」

????G「にぎやかなこった」

また、テントから二人の青年が出てきた。

ブイマル「おっ、リョウヤ、ハヤト、おはよ」

ヒカル「おはようございます!!!」

二人の名はリョウヤとハヤトである。

リョウヤ「おはよ」

ハヤト「おは……なんか腹へった」

ブイマル「そうだな、メシにするか」

そしてブイマル、ヒカル、リョウヤの三人は朝御飯の準備を始め、ハヤトは魚を捕るため、川へ行った。

リョウヤ「行け、ロトム!!!」

リョウヤがモンスターボールを投げると中からプラズマに身を包んだポケモン、ロトムが出てきた。

ロトム「ロトム」

そこでリョウヤは何やら特徴のあるモーターが付いた電子レンジを取り出す。

リョウヤ「ロトム、こいつを頼む」

ロトム「ロトッ！」

ロトムは電子レンジの中に入り、ヒートロトムへとフォルムチェンジする。

リョウヤ「よし。ロトム、よろしくな。じゃあまずはこれと…あれと…」

ロトムはリョウヤに渡された冷凍食品を、どんどん暖めていく。と、そこへハヤトが帰ってきた。

ハヤト「おし、魚捕ってきたぞ」

ブイマル「でかしたぞ！ハヤト」

ブイマルが焚き火でご飯を炊きながら言う。

ヒカルは自分のエレキブルの炎のパンチ（弱火 中火）で目玉焼きを作っている。

ハヤト「よし、じゃあ俺も魚を焼くとするかな。いくぞ！サザン
ドラー…！」

ハヤトはボールから、サザンドラを出す。

ハヤト「サザンドラ、弱火の火炎放射」
サザンドラ「ドラッ！！」

ハヤトとサザンドラは魚を焼き始めた。

シュウ「メタグロス、コメントパンチ！！！！」
マサヤ「穴を掘るでかわせ！！」

シュウとマサヤの二人はバトルをしている。
ミストはそんな6人を黙って見守っている。そして、食器の用意を始める。

準備をしていないシュウとマサヤは量を減らされ、次こそはちゃんと準備するぞ、と昼には忘れる誓いをする。

これがこの7人の、日常の光景である。

午後4時頃、ヒマワキシティ。

ツリーハウスの立ち並ぶ町に、あの7人の姿があった。

ブイマル「さあ、まずはポケモンセンター、そこからヒマワキジムだな」

どうやら彼等は、ジム巡りをしている様だ。しかし全員ではない様子。

ポケモンセンターとは、赤い屋根の大きな建物で、ここでは受付にジョーイさんという人がいる。この人たちは皆親戚で女の人はそっくり同じ顔をしている。

シュウ「絶対バッチをGETするZE」

マサヤ「頑張つて下さいよ ブイマルさん にシュウさん」

リョウヤ「ひとまず、俺らはトレーニングにでも行くか、ハヤト」

ハヤト「そだな。ヒカル、お前も来るか？」

ヒカル「はい！よろしくお願いします！！」

ミスト「……………」

7人はポケモンセンター…通称ポケセンへと向かった。

ヒマワキシティのポケセンは町の西側にあった。早速入り、ジョ

ー伊さんに傷ついたポケモンを預ける。その後、預けなかったポケモンと共にそれぞれの場所へと向かった。

ヒマワキジム

シュウ「たのもおおおおおおお！！！！」

ブイマル「騒がしいぞ。迷惑だろうが、シュウ」

大声を出してジムに入るシュウをブイマルが抑える。

二人が奥に進むと、そこには飛行機のパイロットの格好をした女性、ヒマワキジム、ジムリーダーのナギが立っていた。

ブイマル「お久しぶりです、ナギさん」

ナギ「あら、誰かと思ったらブイマル君にシュウ君じゃない。久しぶり。去年のリーグは惜しかったわね」

どうやら彼等は彼女と顔見知りの様だ。

ブイマル「はい、まさか予選の最初で相手がミストとは思いませんでしたよ」

シュウ「あのマサムネとかいうやつ…かなり強かった……」

シュウが珍しくうなだれ…

シユウ「だが俺はへこたれないZEEE!!!次は必ずかああつ
!!!!」

ても無かったようだ。

ナギ「そう言えばあとの5人はリーグでBEST8まで入ってた
っけ?」

シユウ「はいつてましたYOO!!!」

この世界では、各地方にあるジムのジムリーダーを倒すことで手
に入るバッチを8個、集めることで5つの地方で行われるポケモン
リーグと言う大会に出ることが出来る。まずは、バッチを8個あつ
めたトレーナーと昨年のリーグでBEST8入りした者で予選を戦
う。その勝者と昨年のBEST4入りしたもので本選を行い、優勝
者を決める。

さらに、優勝者と準優勝者はこの世界で最もレベルの高い、全ポ
ケモントレーナー憧れの大会…ワールドチャンピオンリーグ(通称
WCR)に参加することができる。WCRに参加出来るのは、他に
各地方の四天王、チャンピオン、フロンティアブレーション等の凄腕の
トレーナーばかりだ。2か月にも及ぶ総勢40人ほどが争うリーグ
戦のチケットは、プレミアがつくほど。

開催する地方はローテーションで変わり、昨年はシンオウ、今年
はイッシュで行われる予定だ。

ブイマル「ミストが昨年のホウエンリーグ優勝、WCRで18位
でしたね。ハヤトとリョウヤが準決勝で引き分けたんで昨年はホウ
エンから3人、WCRに行ったことになりました」

シユウ「リョウヤはWCRで28位、ハヤトは26位だったよな」
ナギ「みんな頑張ってるわね」

ナギは感心しているが、ブイマルはまだ心残りがあるようだ。

ブイマル「本当なら俺達の中でミストの次に強いのは俺なんだけ
どな…」

シュウ「勝負は時の運、ダツZEEI!!!」

シュウがブイマルを持ち前の高いテンションで励ます。

ブイマル「そうだな…よし！ナギさん、ジム戦お願いします！！
！」

再び元気になったブイマルはナギにジム戦を申し込む。

ナギ「いいわよ。こっちも実力を測る、何てことは言わずに全力
でいくから！！セイカ、審判をお願い」

セイカと呼ばれたヒマワキジムの門下生はバトルフィールドの手
前に立つ。ブイマルとナギも配置につく。

セイカ「では、今からヒマワキジム、ジムリーダーのナギとチャ
レンジャー、ブイマルのジム戦を開始します。ルールは3vs3の
勝ち抜き戦、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。
それでは、バトル開始!!!」

勝負は一瞬でついた。

セイカ「ジ、ジムリーダーの……チルタリス戦闘不能……よってこの勝負、チャレンジャー、ブイマルの勝利」

ナギ「流石ね……」

一瞬で3匹のポケモンがストリート負けし、頂垂れるナギは倒れているチルタリスをモンスターボールに戻す。

シュウ「よし、次は俺と……」

飛び出そうとするシュウを、ブイマルは自分のポケモンをモンスターボールに戻しながら止める。

ブイマル「まで、今ナギさんとそのポケモンは戦ったばかりだぞ」
ナギ「お気遣いありがとう、ブイマル君。私は今からポケモン達をポケモンセンターに預けてくるわ。シュウ君とはその後、さっきとはまた別のポケモンで相手してあげるから」

シュウ「まじすか？ よっしあ　！！ヒヤホッオウイ」

今のナギの言葉を聞いて、テンションが上がるシュウ。

そして、そのバトルもシュウが一瞬で制す。

シュウ「へへへ、バッチGETだぜ!!!」

目的を果たした二人は、ナギと別れ皆の所へ向かっていた。

ブイマル「もうすぐ待ち合わせの時間、急ぐぞ」

そして、集合場所では既に5人が待っていた。

ハヤト「遅いぞ〜二人共〜」

リョウヤ「勝ったのか？」

シュウ「勿論SA!!!」

シユウはヒマワキジムに勝った証、フェザーバッチを見せる。

マサヤ「やりましたね おめでとございます ブイマルさん、
シユウさん ……!」

ヒカル「じゃあ、次はトクサネシティですね」
ミスト「……………行くぞ……………」

7人は歩き始める。

次の目的地に向けて……………

7人のトレーナー (後書き)

さあ、新キャラクター一気に7人登場です。

ナオヤ「出しすぎじゃね!?!」

大丈夫大丈夫。心配ないさ。

ナオヤ「そうだろうか…」

コウタ「今回はあのポケモンですよね!あの……」

コウタ君、それ以上は言ったら駄目だよ。

コウタ「わかってますよ、そのくらい」

ナオヤ「何だ何だ?何の話をしてるんだ?」

教えちゃ駄目だよ。

コウタ「ハイ!」

ナオヤ「???」

コウタ「さて、僕達はこの辺で」

さようなら。あ、後あの7人はチートじゃないんで。さて、皆さん、次回をお楽しみに!!!

ダークライ (前書き)

Yeah!!! Let's party!!!

ナオヤ「どうしたんだよ、(リアルの)俺の口癖なんか叫んで
コウタ「パーティーって…何か良いことでもあったんですか？」

Yes!!! 祝!!!

執筆中又は投稿前の本文消失10回突破!!!

ナオヤ「全然良いことでもめでたいことでもねえ!!!？」

だって…もう既に12回……あらずじと前、後書きを含めたら1
5回消えてるんだよ、もう笑うしかないね。

アハハハハハハハハハハハハハハ

ナオヤ「作者!しつかりしろ!!!」

コウタ「壊れないください!!!」

アハハ…ハア…もうDSやだあ…

コウタ「読者の皆さん、なんだか愚痴みたいになってしまい、誠にすみませんでした。それでは、本編スタート!!!」

ダーククライ

ミスト達7人がヒマワキシティを主発した頃、一匹のポケモンがホウエン地方の上空を飛んでいた……ダーククライだ。

ダーククライ「くそっ、くそっ、くっそおお!!!!ラティオスもラティアスもジラーチも……あの分からずや共があああ!!!!アイツらはこの戦いが世界の危機ということがわからんのかああ!!!!」

……なにやら絶叫している。

実は先程、ラティオスとラティアスには「この戦いには、一切介入しない」と断言された上に、ジラーチに至っては「めんどくさい……もう寝る……」とまで言われていた。しかし特性のナイトメアやあくむで眠っていたジラーチを、無理やり起こしたダーククライも悪いのだが。

ダーククライ「……くっ……流石に6匹だけでは争いをくい止めるのはまず無理だろう……他に協力者を探さないと……」

その時、ダーククライは北の空にオーロラのようなものが出ていた事に気づく。

ダーククライ「あれは、たしか………よし、行ってみるか」

ダーククライは北の空に向かって飛んだ。

ミナモ沖、上空。

??? 「何しに来た…ダークライ」

ダークライ「……………デオキシス」

オーロラの下に居たのは、胸の中心に紫色の水晶を持つオレンジと薄緑色のポケモン、デオキシスだった。

ダークライ「……………ひとつ話したい事がある…聞いてくれないか？」

デオキシス「丁度いい、俺もお前に話があった」

それを聞いたダークライは、デオキシスが自分達に協力してくれるのかと期待したのだが…

デオキシス「ミュウやレックウザ達と共に戦わないか？」

期待どおりではない…いや、むしろ正反対の事を言ってきた。

ダークライ「…お前…ミュウ達と…」

デオキシス「嗚呼、俺はそっちに協力するつもりだ。ダークライ、お前が来たら戦力になる…一緒に戦わないか？」

ダークライは首を横に振る。

ダークライ「…お前達のやっている事は間違っている…あんな無茶苦茶な目的、果たされてよいはずがない！」

デオキシス「…そうか…お前が噂の戦争反対派か…」

デオキシスは敵意をむき出しにしてきた。

デオキシス「もう一度きく、俺達と来る気は無いんだな」

ダークライ「嗚呼、無い」

デオキシス「残念だ…お前ならわかってくれると思ったのだが…それならしょうがない…覚悟しろ、ダークライ」

二匹はしばらく睨みあっていた。

デオキシス「しんそく！」

ダークライ「まもる！」

デオキシスは細身の素早そうな姿…スピードフォームになり、ダ

ークライにしんそくで向かって行ったのだが、ークライはデオキシスがスピードフォルムになる一瞬の隙にまもるを繰り出し、しんそくを防ぐ。

デオキシス「ちっ」

ークライ（俺はデオキシスを倒す気はない…ひとまずこの場を収めなければ…）

デオキシスは弾かれた勢いでークライの後ろに回り込みながら、体が全体的に鋭くなった姿、アタックフォルムになる。

デオキシス「ばかぢk…」

ークライ「ふいうち！」

デオキシスがばかぢからで攻撃しようとするも、ークライは先制技でさらに後ろに回り込み、先に攻撃。それにより、デオキシスのばかぢからは止められてしまった。

ークライ「ークホール！」

ークライは畳み掛ける様に、敵を暗黒の眠りへと誘う技、ークホールを使った。

デオキシス「しんぴのまもり」

今度はゴツイ姿、ディフェンスフォルムに変わったデオキシスがークホールをしんぴのまもりで防ぐ。

ークライ（くっ……一旦デオキシスを眠らせて、この場をどう

収めるのか考えようと思ったんだが…)

さらにデオキシスは、スピードフォームへと姿を変え、

デオキシス「しんそく！」

デオキシスは再び、しんそくでダークライに向かっていった。

ダークライ「まもる！」

ダークライは咄嗟にまもるを発動させたのだが…

デオキシス「甘い！」

デオキシスはしんそくで攻撃せずにダークライの後ろに回り込む。

ダークライ(しまった！……いや、奴はおそらく攻撃するときには
アタックフォームになるだろうから、その隙に攻撃すれば…)

と、考えたダークライがあくのはどうをためながら振り向くと…

デオキシス「ばかぢから！！」

ダークライ「なっ…！」

デオキシスはアタックフォームにならず、スピードフォームのまま
しんそくの勢いに乗ってばかぢからをはなつた。その速さに反応
しきれなかったダークライはばかぢからを真正面からくらう。

ばかぢからは格闘タイプなので、ダークライに効果は抜群だ。

ダークライ「が…！」

ダークライは倒れはしなかったものの、よろめき、落下しそうになる。

その際にデオキシスは、上昇しながらアタックフォームへとその姿を変える。

デオキシス「終わりだ。めいそう…はかいこうせん!!!」

ふらついているダークライに向かって、デオキシスは上から叩きつける様にはかいこうせんを放つ。

ダークライ「……………っ」

ダークライは悲鳴をあげる間もなく、遙か下の海へと落ちていった。

デオキシス「やったか…だが、ダークライを捕らえておけば、後から有利になるかもしれんな…よし」

デオキシスはダークライが上がって来ない事を確認すると、自分の影の様な…分身の様な者を大量に造りだした。

それはダークライを探し、下の方へと向かって行った。

ダークライ (後書き)

ということ、ジンダイ初のバトルシーンでした。うまく書けたかな…(汗)

コウタ「ていうか、ダークライさんの性格が最初と最後で違う気が…」

……まあ、いいんじゃない？彼の個性なんだよ、きっと

コウタ「そうですか…次は僕たちだよね」

うん、コウタのパートナーとなる守護神と呼ばれるポケモン達とは何者なのか!?

コウタ「次回もよろしくお願いします!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2011年12月7日03時02分発行